

ミルトン・フリードマンを論じる*

若田部昌澄

早稲田大学政治経済学術院

I. はじめに

生前も死後も毀誉褒貶の激しい人物ではあるものの、ミルトン・フリードマン（1912-2006年）が20世紀後半を代表する経済学者の一人であることは間違いない。20世紀後半の経済学が経済学史の研究対象となる過程で、フリードマンについての研究は今後本格化していくと考えられるが、経済学史家が論じるにはどのような視点があるだろうか。

本報告では、フリードマンを経済学史の対象として論じるという課題をとりあげ、文献を展望しながら、歴史の対象としてとりあげるための複数の文脈のなかでフリードマンを位置づけるという方法を提唱したい。まず指摘しなければならないのは、20世紀後半については経済学者の個人文書が豊富に存在することである。ことにフリードマンについては、晩年を過ごしたスタンフォード大学フーバー研究所に膨大な文書が保存されており、¹研究はフリードマンの著作のみだけでなく、文書類を利用する段階に至っている。²

通常、フリードマンはシカゴ学派、新自由主義者、市場原理主義者、マネタリスト（反ケインジアン）など、単純化されて表現されることが多い。しかし、経済学史の視点から彼を理解するためには、彼が複数の歴史的な文脈に属していたことを正確に理解しておく必要があると思われる。その視点をここでは暫定的に（1）20世紀後半の経済科学、（2）全米経済研究所（NBER）の研究伝統、（3）シカゴ学派の研究伝統、（4）貨幣・景気循環理論からマクロ経済学へ至る経済理論史、（5）パブリック・インテレクチュアル、（6）新自由主義運動としてまとめてみたい。

II. 6つの視点

（1）20世紀後半の経済科学。フリードマンが主に活躍した時代は、経済学のスタイル、イメージが大きく変わった時代でもある。これまでも進行してきた経済学の制度化は、アメリカを経由して世界的に拡散した。経済学は数学化しただけでなく、数理統計学とも密

* 本報告の基になった研究は、日本学術振興会からは必要不可欠な資金援助（科学研究費基盤研究（C）課題番号：22530199）を受けた。記して感謝したい。E-mail：wakatabe@waseda.jp

¹ 以下の目録を参照のこと。http://www.oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/tf7t1nb2hx

² その視点については議論があるとしても、エーベンシュタインの伝記は文書類を利用している（Ebenstein 2007）。また、内面的な省察に乏しいもののフリードマン夫妻の自伝も一次資料である（Friedman and Friedman 1998）。

接な交渉をもつようになった。³フリードマンは数学と統計学に強い経済学者としてその経歴を出発した。また経済学はより共同作業となり外部資金を獲得してワークショップで論文を発表する形式が普及した。フリードマンはシカゴ大学でMoney and Banking Workshopを組織し、彼のもとでPh. D論文を書いた学生と論文集を刊行した。そうした学問の組織者としても重要である (Emmett 2007)。

(2) 全米経済研究所 (NBER) の研究伝統。ただし、多くの論者が指摘するようにフリードマンの研究スタイルにはP・サムエルソンやK・J・アローとは異なる側面がある。それは第一に、公理主義的でない。第二に、フリードマンは実際に自分でデータを収集し統計を作成し分析するという実証的な態度があった。この側面については、フリードマンが長く関与したNBER、そして最終的に彼が博士論文を提出したコロンビア大学の伝統を指摘しなくてはならない (Hammond 1996, 2008)。フリードマンがNBER研究員アンナ・J・シュウォーツと書いた主著『合衆国貨幣史、1867-1960年』(Friedman and Schwartz 1963)は、NBER創設者W・C・ミッチェルに負うところが大きい。ミッチェルは貨幣についての研究者として出発し、景気循環に関心が移った。内容についても、ミッチェルとフリードマンらは①マネー・ストックの変化が経済活動とは独立に起こりうること、②マネー・ストックの変化が経済活動に大きな影響をもたらしうること、③①と②から貨幣は重要といえること、④フリードマンらは貨幣的要因に集中したものの、非貨幣的要因を無視していない。ミッチェルは非貨幣的要因について多くを論じた。ただし、⑤ミッチェルは伝達経路として銀行貸出 (信用経路) を重視したのに対して、フリードマンらはマネーのみを論じたという違いもある (Rockoff 2010)。

(3) シカゴ学派の研究伝統。とはいえ、多くの人にとってフリードマンといえばシカゴ学派である。シカゴ学派については、近年研究が盛んになっている (Van Overtveldt 2007、Freedman 2008、Emmett 2010a) である。学史家には周知のように、シカゴ学派の特徴を一つないしは少数の「コア」でくくることは危険であり、経済学者についてもF・H・ナイト、ジェイコブ・ヴァイナー、ヘンリー・サイモンズ、ポール・H・ダグラス、ヘンリー・シュルツの時代から、フリードマン、ジョージ・J・スティグラ、アーロン・ディレクター、ゲイリー・S・ベッカーを経て、ロバート・E・ルーカス・ジュニアから現代のラグラム・ラジャン、ジョン・コ克蘭、スティーブン・レヴィットに至るまで多くの変遷を経ている。その変遷は経済学のスタイルとも関わり、現代においてはフリードマン時代のシカゴ学派なるものの存在を認めることは難しいといえる。⁴1960年代のシカゴ学派は、

³ 統計学者としての側面は未開拓の領域である。レナード・サヴェッジと組んだ意味が重要だろう。

⁴ フリードマン自身も1976年の引退後はスタンフォード大学フーパー研究所に拠点を移し、シカゴとは距離を置くことになる。

フリードマンとスティグラーが作り出した歴史的産物として理解しなくてはならない。

それをロス・エメットは「応用政策科学としての経済学」(Emmett 2010a)として特徴づけている。その支柱は経済学の有用性をフリードマンの方法論論文と、経済主体の行動を選好の多様性に帰結させないスティグラーとベッカーの選好論文 (Stigler and Becker 1977) である。フリードマンの方法論については実に多くのことが論じられている (Maki 2009)。しかし、フリードマン自身は後にも先にもこの問題に立ち返ることはなかった。彼にとって方法論文は応用政策科学としての経済学の маниフェストであり、後は実際に仕事をするだけであった。ただし、フリードマン自身によるシカゴ学派についての「歴史」は単純にすぎるとしても、主著『合衆国貨幣史』は 1930 年代シカゴの経済学者の思想の多くを受け継いでいることも確かである (Rockoff 2010)。また、フランク・ナイトの経済学理論への懐疑も、ナイト自身が『経済組織』を著したことと比較されるべきだろう (Emmett 2010b)。

(4) 貨幣・景気循環理論からマクロ経済学へ至る経済理論史。貨幣数量説の再説、変動相場制の擁護、政策ラグの強調、『合衆国貨幣史』、ケインジアンとの論争、1970年代大インフレ期、ボルカーの登場によるその鎮圧と、生涯を通じてフリードマンが関心を寄せたのは貨幣と金融政策の問題であった。しかし、ケインズに批判的であった側面や、1930年代のシカゴとの連続性を強調しすぎると、フリードマンの経済学が重要な点において大不況後の、つまりはケインズ後の経済学の一変種であるということを見失ってしまう (Laidler 2010)。第一に彼の貨幣数量説はなによりも貨幣需要関数を強化したものであり、流動性選好関数との類似性がみられる。第二に 1940年代においてはフリードマンの分析用具はケインズ経済学における需給ギャップでインフレを説明するものだった (Friedman 1942; Levrero 2008)。第三に大不況についてもFRBによる金融政策の失敗を強調することで、むしろ経済安定化のための望ましい金融政策運営について議論している。貨幣自由発行をめぐるハイエクとフリードマンには無視できない距離があり両者を同一視するのは正しくない。要するにフリードマンは大不況後の経済学者であった。

さらにケインジアン v s マネタリストの論争で明らかになったように、両者の論争は内容についてだけでなく、スタイルの違いをめぐる論争でもあった。数学モデルと計量分析を用いて貨幣の経済への伝達経路の理論的根拠を問うたケインジアンに対して、フリードマンはNBER的であった。現代マクロ経済学との対比も重要な論点である。ルーカスらの合理的期待を組み込んだ景気循環モデルが登場したとき、彼らは「マネタリズム・マークII」と呼ばれた。予期せぬ貨幣的ショックだけが実物経済に影響を及ぼすという結論部分は確かにフリードマンらマネタリストと近いといえた。しかし、その後の進展が明らかにするように、マクロ経済を短期的にも均衡現象として描写するという方法論はマネタリ

ストとは異なるものだった。現在、ケインジアン v s マネタリスト論争が過去のものとなったとすると、それはこうした現代マクロ経済学の方法論的变化によるところが大きい。

(5) パブリック・インテレクチュアル。公衆の間でフリードマンは、『資本主義と自由』(Friedman 1962)、そして妻であり同志でもあるローズとの共著『選択の自由』(Friedman and Friedman 1980)、さらには *Newsweek* 誌への定期コラムの寄稿で知られる。しかし、なによりもまず科学者としての認知を強く欲したフリードマンは、当初は公衆向けに発言することに消極的だった。そちらに乗り出したのは妻ローズの後押しがあったからこそであった。もっとも、応用政策科学を標榜する経済学として経済学には現実に役立つことを世に訴えることはシカゴ学派の中では自然な展開であったと思われるかもしれない。しかし、それでもスティグラーのように啓蒙活動に意義を見出さない立場もありえた。経済学者以外に対する発言に意義を見出したのはフリードマンの選択であった。

(6) 新自由主義運動。フリードマンの貢献がもっとも論争的な色彩をおびるのはこの領域である。いわゆる新自由主義、リバタリアニズムについては、第一にその思想内容を理解するだけでなく、一つの運動史としてみる視点が必要である。そうしたものとしては、Doherty 2007 と Mirowski and Plehwe 2010 という対照な研究があるものの、どちらも知識人・政治家・実業人のネットワークの中で新自由主義、リバタリアニズムをとらえようとしている。また、前者はリバタリアンの立場からアメリカ政治経済思想の文脈を強調しており、後者は国際的運動の一環としてモンペルラン協会の役割に焦点をあてているという違いがある。第二に、フリードマン自身は新自由主義という言葉の使用を慎重に避けていた。⁵フリードマンの擁護する自由主義の内容そのものも、時代背景の影響を受けている。たとえば、自由を擁護する論拠を自由そのものに求めるのか (Friedman 1962)、あるいは自由とその結果としての繁栄に求めるのか (Friedman and Friedman 1980) で彼の主張は変化している。第三に、こうした活動には賛否両論が寄せられ、現在でも寄せられている。ことに現在の経済危機で批判は高まっている。「フリードマンの時代」への評価は様々であるものの、彼が影響力を及ぼしたことについては前提とされている⁶。そうした影響力の有無と程度の検証も研究課題の一つである。

III. 終わりに

本報告では、複数の歴史的な文脈を強調する6つの視点から経済学史のなかでミルトン・

⁵ 例外は Friedman 1951 である。ただし、ここでいう新自由主義は古典的自由主義である。

⁶ 批判的なものとして Kline 2007、根井 2009、Mirowski and Plehwe 2010、肯定的なものとして Shleifer 2009 がある。アルゼンチンのピノチェト（発音としてはピノシェに近い）元大統領とシカゴ大学との関係については Valdés 1995、フリードマンのパブリック・インテレクチュアルだけでなく経済学者としての責任の取り方については Schliesser 2010 がある。

フリードマンを位置づける試みを行った。これら6つの視点から、どのような像が浮かび上がるか。20世紀の経済学は前半と後半で大きなスタイルの変化があり、フリードマンは後半の経済学を代表する存在であった。フリードマンの思想的源泉はシカゴに限られずNBER、ことにミッチェルの影響が大きい。シカゴ学派についてもそういう名前のもとで単一の学説があるわけではなく、過去との連続・継承の側面と、新しく加わった要素、捨てられた要素がある。貨幣・景気循環の歴史からすれば過去からの貨幣数量説の伝統の継承と復活と革新を同時に達成した。自由主義についても伝統の継承と復活と革新を同時に達成した。しかし、その彼の革新もまた歴史の一コマである。

参考文献

根井雅弘 (2009)、『市場主義のたそがれ』中公新書。

Doherty, Brian (2007), *Radicals for Capitalism: A Freewheeling History of the Modern American Libertarian Movement*, New York: Public Affairs.

Ebenstein, Lanny (2007), *Milton Friedman: A Biography*, London: Palgrave Macmillan. (大野一訳『最強の経済学者 ミルトン・フリードマン』日経BP社、2008年)

Emmett, Ross B. ed (2007), “Sharpening Tools in the Workshop: the Workshop System and the Chicago School’s Success,” Mimeo.

———(2010a), *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, Cheltenham: Edward Elgar.

———(2010b), “*The Economic Organization*, by Frank H. Knight: A Reader’s Guide,” in *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, Cheltenham: Edward Elgar, pp.52-58.

Freedman, Craig F. (2008), *Chicago Fundamentalism: Ideology and Methodology in Economics*, Singapore: World Scientific.

Friedman, Milton (1942), “Discussion of the Inflationary Gap,” *American Economic Review*, Vol.32, No.2, pp.314-320.

———(1951) “Neoliberalism and Its Prospects,” *Farmand* 17: 89-93. Milton Friedman Papers, Box 42, File 8.

———(1953) “The Methodology of Positive Economics,” in *Essays in Positive Economics*, Chicago: University of Chicago Press, pp.3-43. (佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房、1977年)。

———(1962), *Capitalism and Freedom*, Chicago: University of Chicago Press. (村井章子訳『資本主義と自由』日経BP社、2008年)

———, and Rose D. (1980), *Free to Choose: A Personal Statement*, New York: Harcourt Brace

- Jovanovich. (西山千明訳『選択の自由』日経ビジネス人文庫、2002年)
- , and — (1998) *Two Lucky People: Memoirs*, Chicago: University of Chicago Press.
- , and Anna Jacobson Schwartz (1963), *A Monetary History of the United States, 1867-1960*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Hammond, H. Daniel (1996), *Theory and Measurement: Causality Issues in Milton Friedman's Monetary Economics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- — — (2008), “Friedman’s Methodology Essay in Context,” in Robert Leeson ed, *The Anti-Keynesian Tradition*, London: Palgrave Macmillan, pp.78-95.
- Kline, Naomi (2007), *The Shock Doctrine: The Rise of Disaster Capitalism*, New York: Metropolitan Books.
- Laidler, David (2010), “Chicago Monetary Traditions” in *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, Cheltenham: Edward Elgar, pp.70-80.
- Leverero, Enrico Sergio (2008), “Friedman in Washington (1941-1943) on Taxation and the Inflationary Gap,” in Robert Leeson ed, *The Anti-Keynesian Tradition*, London: Palgrave Macmillan, pp.47-73.
- Maki, Uskali ed. (2009), *The Methodology of Positive Economics: Reflections on the Milton Friedman Legacy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mirowski, Philip, and Dieter Plehwe eds. (2009), *The Road From Mont Pelerin: The Making of Neoliberal Thought Collective*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Rockoff, Hugh (2010), “On the Origins of *A Monetary History*,” in *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, Cheltenham: Edward Elgar, pp.81-113.
- Schliesser, Eric (2010), “Friedman, Positive Economics, and the Chicago Boys,” in *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, Cheltenham: Edward Elgar, pp.175-195.
- Shleifer, Andrei (2009), “The Age of Milton Friedman,” *Journal of Economic Literature*, Vol.47, pp.123-135.
- Stigler, George J., and Gary S. Becker (1977), “De gustibus non est disputandum,” *American Economic Review*, Vol.67, No.2, pp.76-90.
- Valdés, Juan Gabriel (1995), *Pinochet's Economists: The Chicago School of Economics in Chile*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Overtveldt, Johan (2007), *The Chicago School: How the University of Chicago Assembled the Thinkers who Revolutionized Economics and Business*, Chicago: Agate.